

K:DNA

K:DNA——創立133年目を迎えた国学院大学の「遺・伝・子」… 個人・個性を尊重する校風 若いエネルギーが未来を変える

國學院大學学報

●発行 国学院大学 〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目 ●電話 03(5466)0130 ●FAX 03(5466)0528
●E-mail kouho@kokugakuin.ac.jp ●URL www.kokugakuin.ac.jp ●編集 総合企画部広報課／学生アドバイザーメディアチーム [平野玉葉(チーフ・経3)／森淳(サブチーフ・編集長・経営4)／土橋菜央(サブチーフ・法3)／加瀬詩織(外文4)／高村孟司(法4)／福沢孝子(日文4)／落合遥香(法3)／永井伶奈(日文2)／本宮永理奈(副編集長・史2)／山口佳那子(法2)／浅見奈々(法1)／西川淳奈(史1)／野呂侑合香(法1)／本間由(日文1)／柳下桂一郎(史1)／安田一貴(法1)／山木花菜(日文1)]

その他主要記事の掲載面

- P.1～3——●院友ネットワークSpecial「先輩たちの今を追う」
- P.4——●5年後の夢へ向かって～東京五輪に向かう人々～
●文系解体新書「文学部 久野マリ子教授」
- P.5——●K-Club Activities「吹奏楽部」
●潜入！国大生24時！「戸村峻君(経ネ2)」
- P.6・7——●News&Topics
- P.8——●突撃!! 学生記者！「ラジオで味わう漢詩の世界」
●渋谷学生探偵団Z「アニメ聖地巡りで見つける新しい渋谷の姿」

●編集後記

院友ネットワーク Special

先輩たちの今を追う

本学の卒業生は、大学創立以来14万人。さまざまな仕事や活動を通して活躍している人が大勢いる。今回の「院友ネットワーク」は、一挙に6人の院友を紹介する拡大版でお届けする。私たち学生記者は、専修大学松戸高等学校硬式野球部監督を務める持丸修一さん（昭46卒・79期経）、株式会社スマイリーアース取締役の奥龍将さん（平23卒・119期日文）、NPO法人広報駆け込み寺事務局長の鍋木良子さん（昭54卒・87期哲）、俳人である堀本裕樹さん（平9卒・105期法）、千葉県の特産物を使ったピザ店を営む福倉光幸さん（平22卒・118期経営）、「WITH ALS」というALS（筋萎縮性側索硬化症）の啓発活動を行っている武藤将胤さん（平22卒・118期経）に話を聞いた。先輩たちがどのような「今」を生きているのか、その一人ひとりの素顔に迫る。《記事》福沢

武藤 将胤さん
米国・ロサンゼルス出身。本学経済学部卒。卒業後は大手広告代理店に勤務。平成26年10月に「ALS(筋萎縮性側索硬化症)」の診断を受ける。現在も仕事を続けながら、ALSの啓発活動「WITH ALS」を行っている。

福倉 光幸さん
鹿児島県出身。本学経済学部卒。卒業後、千葉県富津市で「PIZZA GONZO」を開業する。平成27年12月には、同県鎌倉南町に2号店となる「Pizzeria Trattoria Da Pe GONZO」のオープン予定している。

お知らせ

「いるか句会へようこそ!」& WITH ALSステッカーを5名様にプレゼント

アンケートに回答してくださった方の中から抽選で5名様に、院友ネットワークで取材をした堀本さんの著書「いるか句会へようこそ!」と武藤さんが活動するWITH ALSのステッカーをプレゼントいたします（締切：11月30日(月)）。①今号で面白かった記事の感想。②今号の満足度5段階（低1～5高）。③プレゼントキーワード（○○○○句会※学生記者が参加した句会の名前）、住所、氏名、所属（在学生〈学科・学年〉、保護者、院友〈本学卒業生〉、本学・本法人教職員、その他のいずれか）を明記の上、ハガキ・FAX・Eメールで国学院大学広報課（連絡先は1面上記参照）までお送りください。また、QRコードからEメール作成画面を開くことができます。なお、お送りいただいた方の個人情報は法令に基づいて取り扱います。



堀本 裕樹さん

和歌山県出身。本学法学部卒。「いるか句会」「たんぽぽ句会」主宰。近著に「富士百句で俳句入門」「いるか句会へようこそ!」恋の句を捧げる杏の物語。又吉直樹さんとの共著『芸人と俳人』など。現在、又吉さん&堀本さんのメールマガジン「夜の秘密結社」を配信中。

鍋木 良子さん

千葉県出身。本学文学部卒。平成17年にNPO法人「広報駆け込み寺」を設立。立ち上げ当初から現在まで、同法人の事務局長を務める。

持丸 修一さん

茨城県出身。竜ヶ崎一高、本学経済学部卒。高校時代は、二塁手として甲子園に出場。大学卒業後は、母校の竜ヶ崎一高、藤代高、常総学院高の監督として通算7度の甲子園出場を果たす。今夏は、就任8年目となる専大松戸高を初の甲子園に導いた。

奥 龍将さん

大阪府出身。本学文学部卒。大学時代は陸上競技部に所属し、第87回箱根駅伝に9区で出場。卒業後は、株式会社スマイリーアースに入社し、現在同社の取締役を務めている。

メディアトリガーplus

ダウンロードと使い方

アプリをダウンロード（無料）

- ① iPhone は「App Store」、Android 端末は「Google play」を開き「メディアトリガーplus」で検索。
- ② 検索結果から「メディアトリガーplus」を選択しインストールしてください。
- ③ アプリを起動。「サービス」のタブを開き、コンテンツの一覧から「Media T+ Campus」をタップするとカメラモードになります。
- ④ 「かざす」ボタンを押しマークのついた画像にかざすと、動画などが再生されます。

ご利用端末について

◇iOS7 以上を搭載した iPhone、iPad および Android OS4.0 以上を搭載した Android 端末に対応しています（一部対応していない端末もあります）。
◇ダウンロードは無料ですが、通信に費用がかかる場合があります。
◇通信環境によって、写真にかざした後、コンテンツが再生されるまでに時間がかかる場合があります。

QRコードを読み込める機種では右のQRコードからメディアトリガーplusのアプリを入手できます。



左のマークの付いた写真などにスマホをかざしてみよう

学長が誘う漢詩の世界

今年4月から、中国古典文学が専門の赤井益久学長・文学部教授が、NHKラジオ第2カルチャーラジオ「漢詩をよむ」（毎週土曜日午後8時30分放送）に講師として出演している。今回私たち学生記者はラジオ番組の収録現場に赴き、取材を行った。（詳細は8面）



《記事》安田

みはるかすもの

昨今、ちまたでチームを巻き起こす中心に、女性の力が動いていることが多く、歴史好きを「歴女」といい、山好きを「山ガール」、城好きを「城ガール」という。大学の中にも、その力は渦巻いている。今年度本学で考古学を学ぶ学生の7割が女子学生だ。これを「考古女子」と呼んでいる▼名刀を擬人化したスマートフォンを使ったゲームに端を発し「刀剣女子」という言葉まで聞かれる。博物館などには日本刀鑑賞にふける女性たちが多く来館し、さらには模造刀を手に入れる人も現れているのだという▼日本刀は、炭素の含有量を調整し不純物を除去するために、刃を何度も打ち延ばす。鍛錬を繰り返すことで強靱な刃と美しい刃紋を生み出す▼ラグビーW杯で、過去7大会で1勝の日本代表が南アフリカを下した試合は、一部で奇跡とも言われ、世界を驚かせた。しかし、選手たちからすれば奇跡ではないだろう。まさに鍛錬ともいえる「世界一の練習量」は、勝利を必然とも言わしめた▼ラグビーは番狂わせが少ないという。それゆえに、あの激闘が、鍛錬に裏打ちされていることは察しがつく。鍛えられた日本の業物が、各県で世界を驚かせるために、ラグビーに学ぶところは大きいにあるはずだ▼次のラグビーW杯は4年後に日本で開催される。切れ味鋭い刀も手入れを怠れば「赤錆」だ。桜のエンブレムが輝き続けるために、ここからが正念場だ。

先輩たちの今を追う

経験を指導へ

持丸修一さん（昭46卒・79期経）は、監督として専修大学松戸高等学校を今夏の全国高校野球選手権大会の千葉県代表として甲子園初出場に導いた。竜ヶ崎第一高等学校、藤代高等学校、常総学院高等学校（いずれも茨城県）の監督として計7回甲子園を経験。名将と言われるここまでの人生は、幼い頃に始めた野球と共にある。持丸さんは、大学4年生でこれからの進路を考えたとき、自分が幼少時代から取り組んできた野球に今後も携わりたいと思い、教員として指導者の道に進むことを決意した。

長年野球を通して、楽しい思いばかりではなく何度も悔しさやつらい思いを味わった。それゆえに、野球をする子どもたちに悔いを残させたくないと思うようになったという。その思いが、勝敗よりもそれまでの過程を大切にす現在の指導方針につながっている。

「成長につながる努力」を教える

指導歴40年を超える持丸さんには、自らの指導方針として貫いてきた信念がある。それは「勝つことだけを目的としない、野球を通して

個人が成長できるチーム」を作ること。大徳寺大仙院（京都府）の閑栖である尾関宗園さんの「いま頑張らずにいつ頑張る！」という言葉大切にしている。生徒たちにもその言葉を繰り



試合の指揮を執る持丸さん

返し言い続けながら、そのときどきで努力を惜しまないことを徹底して指導する。決められた練習量だけに満足せず、一步先へ進もうとする向上心を生徒たちに持たせるのが狙いだ。そのために、生徒たちへの「まだ行けるか」という促しや励ましなどの声掛けを工夫したり、気を抜いていたら厳しい口調で喝を入れたり、さまざまなアプローチで生徒に思いを伝えている。そのときには伝わらなくとも、教え子たちが将来「野球が自分を成長させてくれた、野球をやっていてよかった」と思ってくれることを願っている。

野球を通しての人間教育

指導者としての日々を振り返り、日ごろの努



力が勝利となって報われ、生徒に胸上げされたり握手をしたりなど、生徒と触れ合う瞬間がとても嬉しいと話す。生徒が努力を重ね、目標や夢をつかんだときの喜びは大きい。しかし、本当に目指すものはその先の「人としての成長」だ。高校野球を経て、心身共に成長し、社会で立派に活躍する教え子の姿を見ることが何よりの喜びだという。「練習は苦しいものだが、自分を追い込んで必死に乗り越えようとする姿勢を忘れてはならない。そうした野球を通しての人間教育をしたい」と話した。それが今までもこれからも変わることはない指導者としてのあり方である。次の夏に向けてまた1年、育て上げるチームに期待が膨らむ。

《記事》福沢 《写真》野呂



オーガニックコットンというタスキを胸に

株式会社スマイリーアース取締役

奥 龍将さん

箱根から世界へ

奥龍将さん（平23卒・119期日文）は、本学在学時は陸上競技部に所属し、本学初のシード権を獲得した第87回箱根駅伝に選手として出場を果たした。現在は故郷の大阪で、両親が立ち上げたオーガニックコットン製品を製造販売する株式会社スマイリーアースの取締役として、綿花の原産地であるアフリカ東部ウガンダ共和国と日本を行き来する日々を送っている。

オーガニックコットンとは、3年以上化学薬剤を使わない畑で、農薬や化学肥料、枯葉剤を一切使用せずに栽培された綿花のことだ。ウガンダでは、持続的な農業を目指すオーガニックプロジェクトが平成12年から始動している。同社では、このウガンダオーガニックコットン

を原材料とし、大阪泉州で行う最終製品化の製造工程でも化学薬剤をほとんど使用せず、オーガニックコットン本来の自然のままの風合いを



ウガンダの人たちと（写真提供・奥龍将さん）

残すことにこだわっている。

奥さんは念願の箱根駅伝出場を果たし、努力の継続や情熱を持って取り組むことの大事さを学んだ。大学4年時の箱根駅伝を終えた後、次の目標を見失いかけたときに出会いほれ込んだのがウガンダの農業に一切頼らないオーガニックコットンだった。

チームメイトになる

奥さんは、オーガニックコットンを作っている現地を知るためには「現地の人と同じ生活をし、同じ目線に立つべきだ」と話す。ウガンダへの渡航は、インターンシップを含めると計20回ほどになる。現地での生活は「日本と比べれば厳しい環境下だが、現地の人と肩を並べ

て一生懸命になれることが最高に楽しい」と奥さんは振り返る。

ウガンダでの有機綿花栽培の実情を知るために現地の農家の人たちと一緒に汗を流して働き、語り合うことでチームメイトとして認めてもらえる。そこでようやく綿製品に適したオーガニックコットンの品質向上などについて思いを語り合うことができる。それが本当のフェアトレードだと奥さんは言う。

ウガンダと日本をつなぐタスキに

今年9月、株式会社スマイリーアースが国際協力機構（JICA）に提案したウガンダでの「オーガニック精錬技術を活用した綿花製品の付加価値向上に関する案件化調査」が採択された。同社が取り組んでいる綿製品製造技術をウガンダに移転可能かどうかの調査が始まる。今後スマイリーアース式の工場をウガンダに建てるのであれば、現地で原綿生産から最終製品化までを一貫して生産することが可能となり、ウガンダの綿産業の活性化や農家の収益向上につながる。今回の事業を「ウガンダと日本をつなぐ駅伝」と意気込む奥さんの活躍に目が離せない。

《記事》森 《写真》福沢

広報活動への支援

日々のニュースの中で、企業や自治体など組織の不祥事やトラブルの話題は絶えない。不祥事の報道の裏で、広報担当者は取材にやってくるマスコミの対応などに奔走している。広報担当者が不測の事態への備えを学び、いざというときに相談できる場所がNPO法人「広報駆け込み寺」だ。会員は企業・自治体・大学などを合わせて220を超え、今年6月にNPO法人格を取得してから10年を迎えた。本学卒業生の鍋木良子さん（昭54卒・87期哲）は、同法人の立ち上げから事務局長として代表の三隅説夫さんを支えてきた。

企業では、法務関係は弁護士、税務関係は税理士に悩みの相談ができるが、広報関係の相談をできる相手はなかなかいない。広報担当者の悩みに答えることが、広報駆け込み寺の果たす役割だ。活動内容は、会員を対象にした広報における個別相談や交流会、マスコミ対応の研修

会への講師派遣など多岐にわたる。主に表舞台に出る代表の三隅さんと、事務作業全般を行う鍋木さんの2人が中心となって法人の運営を行っている。

企業などの組織の広報には、組織の顔である代表を中心にPRをする広報と、事件・事故が起きたときに最善の対応を取る危機管理広報がある。同法人で受ける相談は、危機管理広報に関することが多い。鍋木さんは「不祥事などが発生したときは広報担当者による適切な対応が重要」と強調する。ここでの対応を一步間違えてしま

うと世間から組織への不信感を抱かれ、経営が傾く可能性があるからだ。これほど責任の大きな仕事であれば、担当者が判断に迷うこともあるだろう。鍋木さんは「判断に自信が持てるように背中を押すことが私たちの役割」と話す。

変わらない広報の重要性

10年前、間借りの事務所に机1つと電話1台から始まった同法人は広報の重要性を伝え続けてきた。2人はこれまでを振り返り「あっと

いう間に過ぎた」と口をそろえる。この10年間、企業が抱えるトラブルは途切れることがなく、広報担当者の悩みは尽きない。いつの時代も広報は、マスコミや他企業との交流が大切で、人との出会いの中にいざというときのヒントがあるのだ。鍋木さんは広報に限らず「若い世代の方には外に出て、人と会い、多くの経験を重ねてほしい」と学生への思いを話した。

今後も広報駆け込み寺は変わらない思いのまま悩める広報担当者に寄り添い、誰もが駆け込める場所であり続ける。

《記事》平野



広報担当者が駆け込める場所

NPO法人広報駆け込み寺事務局長 鍋木 良子さん

「17文字」に拓かれた文学の道

俳人・堀本裕樹さん(平9卒・105期法)が俳句に出合ったきっかけは、大学2年生のときに学内で途絶えていた句会が復興されたことだった。卒業後、堀本さんは小説家を目指すも、出版社に就職。本格的に俳句を文芸誌に投稿し始めたのはこの頃だ。小説に比べて、17文字に全てを織り込む俳句は投稿を続けやすく、徐々に惹かれていった。



たんぼぼ句会の様子

17文字で表現する"万象"

俳人 堀本 裕樹さん



文学を続けることへの思いが強くなった堀本さんは、故郷の和歌山に帰り、公民館などで句会を開いて上京資金を貯めると、再び上京。当時、所属していた俳句結社から独立して、37歳で第2回北斗賞を受賞した。その2年後には、句集『熊野曼陀羅』(文学の森)で第36回俳人協会新人賞を受賞し、堀本さんは気鋭の俳人として飛躍を続けている。

俳句が映すもの

なかなか文学者として芽が出ず、紆余曲折を経た堀本さんだが「文学は、感じることを全てが糧になる。無駄な経験は一つもない」と話す。

経験が積み重なり、培った感性が文学には表れる。これからの人生も新たに作品へと生かされていく。堀本さんにとって俳句とは、思いを自由に表現する文学であり、森羅万象を詠むことができる奥深い器でもあるのだ。

堀本さんは現在、ビジネスマン対象の句会や中学生への俳句指導など、幅広い層に向けて俳句の楽しさや豊かさを伝えている。最近では芥川賞作家で芸人のピース・又吉直樹さんとの共著作『芸人と俳人』(集英社)が話題になった。敷居の高い印象のある俳句だが、そう感じさせない堀本さんのバラエティに富んだ活動で、俳句の魅力はさまざまな対象へと広がっている。

俳句でコミュニケーション

私たちは今回、堀本さん主宰の「たんぼぼ句会」に参加した。句会と聞いて厳格な雰囲気想像していたが、「たんぼぼ句会」は都内のカフェで行われ、初心者でも気軽に参加できた。俳句は「5・7・5」の17文字に情景や思いが詰まっている。それをどう感じたか、実際どういう意図で作ったのか参加者同士が話し合うときは、17音の短い言葉がきっかけとは思えないほどに深く、白熱したものだった。俳句が生み出すコミュニケーションとその熱は、新しい自分を見つける機会になるだろう。

《記事》浅見 《写真》福沢

自営業のすゝめ

PIZZA GONZO 福倉 光幸さん



試された行動力

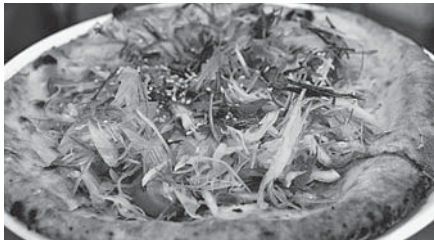
政府主導の地方創生が叫ばれる昨今、官民挙げて地域活性化の事業が立ち上がりつつある。本学卒業生には、単身で千葉県富津市に移住し地元の食材と石窯を使ったピザを提供する「PIZZA GONZO」を開いた若手経営者がいる。鹿児島出身の福倉光幸さん(平22卒・118期経営)は、学生時代から田舎での自営業の道を志し、この地に足繁く通い、ついには移住。地元の農家の方や同世代の人たちと農作業などの活動を通して交流を深めてきた。周囲が就職を考える時期になると、起業することを決意。訪れた人に富津市の魅力を伝え、ここでしか味わえない

食事を提供したいと考え、地元の旬な食材と市内の鋸山で採集された金谷石を使った石窯でのピザ作りを始めた。地元の人の協力を得て、店舗の確保から内装、石窯まで、全てが手作りだ。そして平成23年3月、卒業からちょうど1年で、念願の「PIZZA GONZO」が開店した。

ひとりではなく、みんなで

千葉県富津市金谷の観光案内所「石の舎」の中にある「PIZZA GONZO」は、カフェのような落ち着いた雰囲気、どこか温かみがある。店内にある椅子とテーブルの一部は地元の方から頂いた。ホールや厨房は家族が手伝って

- ④観光案内所と併設されている店舗の外観
⑤ミョウガをふんだんに使った9月の月替わりピザ《ミヨーガ》



いる。提供されるピザも地元の方からのアドバイスで改良を重ねた。初めは福倉さん一人の夢だった店は、今では周囲の人に支えられ地域に根付いている。その分責任が増えて大変

だが、今年12月には新たに2号店「Pizzeria Trattoria Da Pe GONZO」を鋸南町の道の駅「保田小学校」にオープンする予定だ。

もっと若者のチャレンジを

店の知名度が上がってお客さんが来るようになって、メニューに変化をつけて飽きさせない工夫は怠らない。月替わりで季節の旬の食材を使ったピザや定番のマルゲリータはもちろん、甘いアイスの乗ったスイーツのようなピザまで多彩なメニューが並ぶ。自然のうまみが生かされた福倉さん自慢のピザは、地元の人にはもちろん、週末や大型連休には遠方から訪れたお客さんにも人気で大盛況だ。

自営業を始めるには勇気がいるかもしれないが、「恐れているくらいならやってみようがいい」と話す。福倉さんの夢は、多くの人の手も借りて叶えられ、そして現在、未来に向けて大きくふくらみ続けている。「私にできたのだから、自分にもできるかもしれないという可能性を信じて、一歩踏み出して若者たちにチャレンジして欲しい」と福倉さんは話す。

《記事》野呂 《写真》森

貫いてきた信念

医療が進歩する一方で、治療法が見つからない難病に苦悩する人も多くいる。国の指定難病の「ALS(筋萎縮性側索硬化症)」も、有効な治療法がまだ発見されていない病の一つだ。ALSは脳からの命令を筋肉に伝える運動神経細胞が侵され、全身の筋力が徐々に低下してしまう難病で、人工呼吸器をつけない場合、平均寿命は発病から3〜5年とされている。院友の武藤将胤さん(平22卒・118期経)は、昨年10月にALSの診断を受け、病氣と戦いながら今年1月から「WITH ALS」というALSへの理解を広める活動を行っている。活動を始めた背景には、「ALSの未来を明るくする」と難病に向き合う武藤さんの決意がある。

病への恐怖心に打ち勝とうとする心の強さは、大学受験の経験で培われたものだ。大学受験の際、勉強する意義を見出せず目前のことから逃げて後悔をした。このとき、何かを成し遂げるためには、逃げずにゴールまでのイメージを持つことが近道だと気が付いた。この経験を生かし、大学時代には本学で企画&イベントサークルideedを設立。武藤さんが掲げているスローガン「世の中を明るくするアイデアを形に」で身近な存在である大学を変えていきたいという思

ALSの未来世界を明るく変える
アイデアを形に

WITH ALS 武藤 将胤さん



いから始めた。この信念は社会人になった今でも変わらない。だからこそ、「ALSの未来を明るくする」という現在の考えに結びついた。

一瞬の時を大切に

WITH ALSの活動は大きく分けて2つある。1つ目は、ALS患者に向けたマークの普及活動だ。マークは、患者が病と共存し、安心して暮らせるようにと厚生労働省が考案した妊娠・出産に関する安全性と快適さの確保を目指す「マタニティマーク」を参考になっている。WITH ALSマークを浸透させ、健常者がマークを見て体が不自由なALS患者の存在に気が付き、手を差し伸べられるようにすることが目的だ。

2つ目は健常者に向けて、ALSの認知・理解拡大を目的としたスポーツ大会等の啓発イベントを開催することだ。「もし、今楽しんでいる

スポーツが急にできなくなったら？」と自分のことに置き換えて身近にALSを考えるきっかけの場として開催している。武藤さんはイベントを通して、いつ何が起こるか分からないから

こそ、今の仲間と過ごす一瞬一瞬が大切だと気付いてもらいたいと強く願っている。

WITH ALSの活動の先に

武藤さんは、今後も「世の中を明るくするアイデアを形に」というスローガンは変えずに活動していくという。今は「ALSの未来を明るくする」という明確なゴールがあるからこそ、試せる治療を積極的に行い、治らない病氣と言われてきたALSを克服することが重要だと武藤さんは考えている。これからも武藤さんはWITH ALSの活動を通して、ALSの認知と理解を広めるとともに、ALS患者が人生を豊かにする方法、そして若い世代の人に自分が変わるアクションを起こすきっかけを届けていく。

《記事》平野 《写真》武藤将胤さん提供



④サポーターマーク ⑤患者マーク

5年後の夢へ向かって ～東京五輪に向かう人々～

2020年に東京オリンピック・パラリンピックが開催されるまで、残り5年を切った。開催に向けて、新国立競技場の建設や追加種目の選定、ボランティアの8万人育成計画など各方面で準備が進められている。「5年後」は遠い未来に感じるが、刻々と近づいている。そのような中で「オリンピック出場」を目指し、日々練習に励む各競技の選手たちが大勢いる。今回は、大舞台で活躍を目指す「選手」とスポーツの祭典を支え盛り上げる私たち「観戦者」にスポットを当て、5年後に控

えた東京オリンピックを追った。

本学柔道部の藤阪泰恒君（健体1）は、ジュニアの大会で実績を積み全日本柔道連盟の強化選手として、オリンピックの舞台での活躍を目指している。また本学卒業生の大森峻太さん（平25卒・121期法）が代表を務めるJapan Tour Guideは、訪日外国人向けのボランティア活動として成果を上げている。それぞれが描こうとしている夢や未来に迫った。

《記事》落合

●オリンピックまでの軌跡

本学柔道部所属の藤阪泰恒君（健体1）は、10月23日（金）～27日（火）にアラブ首長国連邦アブダビで開催される世界ジュニア柔道選手権大会に日本代表として出場する。昨年度、全国高等学校総合体育大会で優勝、講道館杯全日本柔道体重別選手権大会3位の實力を持つ藤阪君は、男

子60kg級で全日本柔道連盟強化B選手に指定されている。2020年の東京オリンピックの大舞台を目指し、日本代表選手として活躍の場を広げる彼を支える信念とは何か話を聞いた。



努力は実を結ぶ

5歳から柔道を始めた藤阪君は現在、強化選手に選ばれ、自分以上の経験や実力のある強豪選手と稽古や大会で接する機会が増えた。相手にリードされたときや手強い相手でも萎縮しないよう日々トレーニングを重ねている。華々しい実績を挙げる藤阪君だが、高校生活では挫折も味わった。

高校2年生の夏、インターハイ予選大会では優勝目前にして、自分より年下の相手に敗北。監督から「1年間何をやってきた

のか。心を入れ替えなさい」と厳しい言葉を受けた。自分自身の甘さを痛感し、柔道ともしっかり向き合うことを決意した。それ以降、絶対に妥協しないことを胸に、練習・筋力トレーニング・減量に励んできた。その結果、翌年のインターハイで優勝。「努力すれば必ず目標を達成することができる」。この言葉を一番に信じ、今も自分に厳しく日々の練習に励んでいる。

夢へ向けて

柔道は、組み手・相手との駆け引き・技

という流れがあり、これらがうまく噛み合ったときに勝負が決まる。藤阪君はここに



得意技の体落としを決める藤阪君

柔道の奥深さと楽しさを感じ、次第に「オリンピックで金メダルを手にする」と夢になっていった。

世界ジュニア柔道選手権大会（10月）とリオデジャネイロオリンピック日本代表選手1次選考会を兼ねた講道館杯全日本柔道体重別選手権大会（11月）と大きな大会を控えている。これら一つ一つの大会で優勝を目指して、持てる時間を柔道へ捧げる姿は、着実にオリンピックへと近づいている。

《記事》加瀬《写真》本間

●訪日外国人をお助け！

今年の訪日外国人数は、昨年度を上回り過去最多になることが確実に。急速に増える外国人観光客は日本経済を下支えする一方で、観光客を受け入れる地域では、ハード・ソフト両面での体制の強化が急がれる。私たち学生記者は、訪日外国人と日本人に交流の機会を提供するJapan Tour Guide（以下・JTG）という団体に注目した。JTGは、日本にいながら外国語を使いたい日本人と、日本でのローカルな体験を希望

する外国人観光客のマッチングを行うほか、街頭に立って、ボランティアガイドをする「お助け隊」の活動を行っている。日本のボランティアの現状は、活発なアメリカやイギリスと比べるとその約半分ほどしか行われていないと言われている。5年後の東京オリンピック・パラリンピックに向けてボランティア8万人育成計画の準備が進んでいる中で、JTGは先駆けともいえる団体である。

お助け隊の活動を体験！

今回は、毎週末に渋谷で行われているお助け隊の活動を体験した。渋谷駅前の交差点付近で「Do you need help? (何かお手伝いしましょうか?)」と書かれたプラカードを掲げていると、外国人が声を掛けてきた。途中、言葉が通じずに焦ることもあったが、他のお助け隊のメンバーの力を借りて身振り手振りを使い、目的地まで案内することができた。実際に案内してみると、不安な気持ちはなくなり、充実感が生まれる。

きっかけは海外での体験

代表の大森峻太さん（平25卒・121期法）は、高校生のときに修学旅行で初めて海外に出て、「自分の知らない世界を知りたい」という思いを抱いた。その後、世界中を訪れ、現地の人に直接案内してもらうことで、その土地をより理解できることに気がつき、JTGの活動を始めた。この活動には「お世話になった現地の人たちに対して恩返しをしたい」という大森さんの思いも込められている。

活動に参加するボランティアの数は増え

つつある。「この活動をもっと知ってもらい、多くの人にボランティアに協力してほしい」と大森さんは話す。目標は2020年に向けて国民の力によって日本を観光立国にすることだ。

オリンピックを見据えて

5年後の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、こうしたボランティアへの参加が必要不可欠だ。語学に不安があっても、「困っている外国人を助けたい」という気持ちがあれば大丈夫。ぜひボランティアに参加してほしい」と大森さんは話す。

東京オリンピックの観戦者としてだけでなく、ボランティアの一員としてスポーツの祭典を楽しむのも、一つの方法ではないだろうか。《記事》西川《写真》福沢・本間



文系解体新書

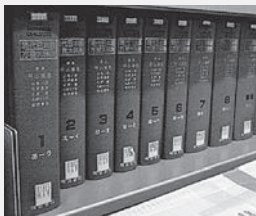
東京女子大学の学生たちが開発した「方言チャート」というアプリケーションが大きな話題を呼んでいる。このアプリケーションは、日常で使う言葉に関する質問に答えると自動的に自分の出身地が割り出されるというもので、その正確さからメディアにもたびたび取り上げられた。それに伴い「方言」の存在にも注目が集まっている。今回は本学の方言研究会の顧問で、方言学が専門の久野マリ子文学部教授に、研究会で指導している方言や言語学について話を聞いた。

方言についてもっと理解を深めよう！

文学部 久野マリ子教授

意外と知られていない首都圏方言

久野教授によると、方言とは全国に存在する全ての話し言葉のことであり、いわゆる「共通語」を話し言葉とする地域は存在しないという。東京、神奈川、埼玉などの首都圏出身の読者の中には、自分の住む地域には方言が無いと感じている人も多いだろう。しかし、首都圏にはいわゆる共



通語とは別の「首都圏方言」が存在する。例を挙げると、マグロヨコバイという黄色い小さな虫を指す「バナナムシ」や、燃やすことを意味する「もす」、割り込みを意味する「横はいり」などの単語がある。これらの単語は共通語としては使われておらず、首都圏内でも限定された地域でのみ使用されているれっきとした方言なのだ。

相手に何かを確認したいときに語尾に「～じゃん」とつけるのは、長野県などで、伝統方言として話されている。これが神奈川県を経て首都圏に入り、今では爆発的に使われている。久野教授による

と、方言は今も昔も若者言葉から発信されるものだという。

身の回りにある方言を知る

本学の方言研究会は昭和6年に設立された。戦時中から数十年間活動を停止した時期があったが、久野教授が本学の教員となり平成11年に再開された。現在は約10人の学生で週に1回活動しており、夏季休暇中には富山県砺波市や新潟県魚沼市などに足を運び、フィールドワークを通してその地域に根付く方言の研究を行っている。他にも漫画を使用した方言の研究などにも力を入れている。

「漫画はたくさんの若者言葉が詰まっている。今世の中で浸透しつつある方言を知ることができる」と久野教授は話す。

方言には「ぬくもり」や「強さ」などのイメージを連想させる効果がある。このような効果を利用して、昨今では漫画の作者が登場キャラクターに方言を使わせたり、経済効果を上げるために地方自治体が観光PR用のキャッチコピーに方言を使用したりする例が見られる。皆さんも、方言に対してどのようなイメージを抱いているか、これを機に一度考えてみてはいかがだろうか。

《記事》柳下《写真》永井



K-Club Activities No. 011

吹奏楽部

多くの人に届く音を紡ぐ

本学体育連合会吹奏楽部は今年で創部56年の長い歴史を持つ。主な活動として、吹奏楽コンクール、毎年12月に行われる定期演奏会、部会の応援演奏、イベントでの演奏がある。昨年の東京都大学吹奏楽コンクールの予選では金賞を受賞し、21年ぶりに都大会へ出場を決めたほか、今年2月に行われた建国記念の日奉祝パレードではパフォーマンス賞を受賞するなど、実績を重ねている。今回は、第54代主将の田廣恵梨さん(法3)に同部の音楽に対する姿勢、思いを聞いた。



最中だ。田廣さんは「聴いている人も演奏をする自分たちも、楽しめることが一番良い演奏だと思う。観客を、引き込む演奏を定期演奏会に向けて目指したい」と意気込む。

吹奏楽部は、今年度全体の活動テーマを「紡」～つむぎ～としている。自分たちの音楽を通してさまざまな人と関わりたい、音楽の楽しさを届けたいと願い、このテーマに決めた。観客の心に「届く音」を追求し紡ぎ出す吹奏楽部の定期演奏会に期待が高まる。

《記事》山口 《写真》加瀬
《映像》本宮



写真にスマホをかざすと本学体育連合会吹奏楽部の動画がご覧になれます



応援活動で培う力

現在、吹奏楽部は部員約80人が所属しており、夏の吹奏楽コンクールと冬の定期演奏会を2本の柱として活動している。この2つの活動に加え、年間を通して野球や駅伝などの応援活動やイベントでの演奏も多く行う。他部会の応援演奏では、「選

手にもっと応援を届けたい」と考え、今年9月に従来の応援パターンを少し変えたという。以前までは1曲ごとに区切っていたが、メドレー形式で曲を演奏し続けることで盛り上がりが持続するようにした。これにより、観客も選手もより一丸となって応援することができると考えたのだ。田廣さんは「観客を引き込み、楽しませることのできる演奏力を応援活動で培っている」と

話す。その演奏力はコンクールや定期演奏会にもつながっている。

定期演奏会に向けて

同部は、12月18日(金)午後6時から杉並公会堂で1年間の集大成となる定期演奏会を開催する。定期演奏会を最後に代替わりとなるため、今は全力で練習をしている

潜入! 国大生24時

絶妙なバランス感覚!!

大道芸とお笑い

戸村君が大道芸に出合ったのは中学3年生のとき。野球部を引退し、他に熱中できるものを探していたときに手元にあった野球のボールを野球以外で使ってみようと考えた。そのボールを使ってジャグリングの練習をしたことが、大道芸を始めたきっかけとなる。大道芸を習得し始めた頃、あるお笑いライブを目にし、そのとき、自分も挑戦してみたいと思い、お笑いを始めることになる。すぐに頭角を現し、高校1年生のときには高校生のお笑い日本一を決めるイベント「お笑い甲子園」で3位の

成績を残した。この頃自分にしかできないことをしたいと思い、お笑い大道芸を組み合わせることを考えついたという。

笑顔を生み出す

現在はお笑い大道芸人として、お祭りやイベントなどを中心に各地を飛び回っている。原動力はお客様の笑顔を生み出したいという気持ちである。十八番のバランス芸をしながらも「最近パイプ椅子を乗せすぎて出てきた気がするんですよ。顎が…」などとユーモアあふれる喋りを交え、笑いを巻き起こす。イベント中に子どもか

らのリクエストがあれば快く応じ、観客とも気さくに会話をする。親しみやすいキャラクターから子どもを中心に人気を集めている。わざわざ足を運んでくれた人や、自分を選んで依頼してくれた人をがっかりさせるわけにはいかないと、満足度ナンバーワンを目指して日々技を磨いている。

代表理事として

また、最近は「UNGサポーターズ」というNPO法人を立ち上げ代表理事としても活動する。UNGとは売れ(U)ない(N)芸人(G)の頭文字をとって、「売れない芸人を食べる芸人」を目標に掲げる。「売れる芸人になることができるのはほんの

一握りだ。しかし、食べることに困らない芸人にするお手伝いであればできるのではないかと考えて立ち上げに至った」と戸村君は言う。所属する芸人への仕事の周旋業からFMラジオ局の番組制作や広告業まで幅広く展開している。「自分は周りの人に恵まれ助けられてきたから、お笑い大道芸人を続けられた。だから今度はその恩返しをしたい」と話した。

絶妙なバランス感覚でお笑い大道芸人と代表理事を両立させる戸村君。今後の多方面での活躍に目が離せない。

《記事》土橋 《写真》浅見



十八番のバランス芸。一つ1・5キロのパイプ椅子を頭に乗せる戸村君

with

岩手県紫波町間伐体験交流ツアー

8月27日から30日の4日間、環境について学ぶ本学の学生団体「森木会」主催の「間伐体験交流ツアー」が岩手県紫波町で行われた。12回目の開催となる今年は、在学生・卒業生・教職員ら合わせて47人が参加した。

8月27日午前7時に本学渋谷キャンパスをバスで出発した一行は、約8時間かけて現地に到着。NPO法人「紫波みらい研究所」の案内で、紫波町が推進する循環型まちづくり関連の施設を見学した。建物が紫波町産の木材でできている「虹の保育園」では、広い教室の天井に横たわる樹齢100年以上と言われる木材を使った梁が堂々とした存在感を出していた。

2日目から間伐体験がスタート。森林整備活動を行っているNPO法人「山仕事くらぶ」の方から鉋やのこぎりの使い方を教わりながら、町内の個人所有の山林で間伐作業は進められた。慣れない道具や山の傾斜に苦戦しながらの作業は相当な体力が必要だった。作業の合間にある「小屋」と呼ばれる小休憩では、地元の伝統的なお菓子、きゅうりやトマトといった夏野菜が振る舞われ、参加者は疲れを癒やすとともに、互いの交流を深める時間ともなった。

3日も間伐作業が続く。一緒に作業をしていた地元の方から「空が見えてきたね」と声を掛けられ、ふと上を

見上げて驚いた。地面に走る根や枝に注意しながら作業をしていたので足元ばかり見ていた。作業終盤まで森にこれまで生い茂った木々で遮られていた光が、再び降り注いでいることに気が付かなかった。2日間という短い期間の間伐作業だったが、自然の素晴らしさと間伐などの定期的な管理の必要性を肌で触れ、感じることでできた貴重な体験となった。

このツアーでは、身近に触れることのない雄大な自然と出会うだけでなく、多くの人々と交流できるのも魅力だ。地元の方だけでなく、本学教職員の方や他学部の学生とも間伐を通して知り合える。来年も岩手の里山で見知らぬ誰かと出会いたい。

本間由(日文1)
(写真提供: 森木会)



『古典不要論への反撃!?書評劇場』

上野誠(奈良大学教授、昭59卒・92期文、昭61修・94期博前文、平2修・98期博後文) 著

筆者の記した書評を一冊にまとめたユニークな本である。

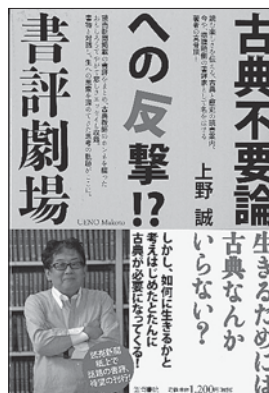
書評というのは、それを書く者が「いかにその書を読みとったのか」を書くものだと私は思っている。だから、目次などを紹介して、ということが書かれているのかを詳細に紹介するのは、書評のための準備に過ぎない。まして、紙片が少ないものなら内容を紹介するより、大胆にこう読めると記すことの方が、意味があると思っている。そういう意味で筆者の書評は、実に当を得ている。本人が後書きで記しているように、「一つのエッセイとして書く」ことの方が、ずっと評される本への誘いとなるからである。

筆者が書評をまとめるのに用いたコンセプトは、「古典と歴史を読む必要性」である。筆者の縦横な読みがよく現れた興味深いエッセイばかりである。一例を挙げると、「観能に際して演目の解説を座席で見るのはやめて欲しい」と言い、展覧会におけるイヤホンガイドや、古典芸能の字幕ディスプレイなども無用の長物と切って捨てる。そしてそれは、「五官を使って何かを読み取ることが大切だからだ」と言う。私などは「仰ることは正論だけど、そんなこと言ったって」と言いたくなる。それがこの本の面白さである。脚注として加えたこぼれ話風の加筆も実によい味を出している。

普通は「この本のご一読をお奨めしたい」と拙文を締めくくることが、この本で評された本を読んで欲しい」とするのが私と筆者の共通の願いだろう。(笠間書院刊、1200円+税)

大石泰夫(盛岡大学教授、昭58卒・91期文、昭61修・94期博前文、平1修・97期博後文)

新刊紹介



NEWS & TOPICS

国際交流歓迎会

10月9日午後5時45分から、渋谷キャンパス若木タワー有栖川宮記念ホールで「国際交流歓迎会」が開催された。9月に来日したばかりのK-STEP交換留学生12人のほか、彼らのサポートをする学生のK-STEPアシスタントや留学経験者など、参加者は約140人に上った。開会にあたり、田原裕子国際交流推進部長・経済学部教授のあいさつと乾杯の発声があり、食事を囲んでの歓談に移った。

歓談の合間には、グループに分かれて留学生の母国に関するクイズや留学生の自己紹介があった。参加者の多くが初対面同士



で、はじめは緊張した面持ちの学生も見られたが、ゲームを通してすっかり打ち解け、交流を楽しんでいる様子だった。

歓迎会は、校歌斉唱などをしてお開きとなった。

《記事》山口 《写真》平野

国学院で英語寄席

10月7日午後6時から、渋谷キャンパス120周年記念1号館1206教室(和室)で文学部外国語文化学科主催の「桂三輝、国学院で英語寄席」が開かれた。これは同学科が進めている「文化発信型英語力開発活動」の一つで、約60人の観客が集まった。

カナダ出身の桂三輝(かつらさんしゃいん)さん(写真)は平成11年に来日し、20年に6代目桂文枝(当時桂三枝)さんの下に弟子入り。上方落語界初・戦後日本初の外国人落語家として活躍している。今回は、古典落語の中から「寿限無」や



「味噌豆丁稚」、「動物園」を全編英語で口演。また来日当初の思い出や、桂文枝さんに弟子入りしてからの苦労話も披露され、観客の笑いを誘った。

お客さんからの質問コーナーでは、桂三輝さんが落語家になったきっかけや海外での高座の話などに、観客は興味深そうに聞き入っていた。

《記事・写真》本間

K-STEP江戸東京博物館見学

9月30日、本学交換留学生K-STEPの授業「日本の文化理解・フィールドトリップ」の一環で、K-STEP交換留学生12人、日本人学生のK-STEPアシスタント3人の合計15人が、両国にある江戸東京博物館を訪れた。今年9月に来日したばかりの交換留学生同士や日本人学生との交流、日本

文化への理解を深めることを目的に、今回のイベントは実施された。

同博物館では、常設展を見学。展示室では、楽しみながら理解を深められるよう、展示される資料にまつわるクイズが国際交流課から用意された。クイズは江戸歌舞伎の代表作『助六』の舞台設備の展示を前に

舞台に置かれていない道具を選択肢の中から探すなど、真剣に博物館を見学しないと答えが見つからない問題ばかり。日本語での生活を始めたばかりの交換留学生は、クイズの問題文の内容を理解するところから苦戦していた様子だったが、K-STEPアシスタントからヒントをもらい、仲間同士で協力をしながら、答えを探していた。

《記事・写真》平野



平成27年度 東都大学野球秋季1部リーグ戦

9月2日に開幕した平成27年度東都大学野球秋季1部リーグは、さわやかな秋空の下、毎週熱戦が続いている。春季リーグで第6週まで優勝戦線に残りながらも3位に終わった本学は、22年秋以来の2度目の優勝を目指す。しかし、本学は開幕から調子が上がらず、開幕カードの日本大学戦では連敗し勝ち点を落としている(9月号[638号]既報)。

第3週の中央大学戦1回戦(9月15日)では、再三得点のチャンスを作るも2-4で惜敗。翌日の2回戦では、開幕以来の連敗の流れを断ち切るべく安西拓人君(健体2)がリーグ戦初先発。打線も奮起し5-3で今季初白星を挙げた。両者勝ち点をかけた3回戦の試合は、翌17日に予定されたが雨天のため持ち越しとなった。続く第4週となる亜細亜大学戦でも1回戦(9月22日)を亜細亜大学が先勝(0-1)、9月24日の2回戦は本学が5-1で制したため3回戦が予定されたが、これも天候の悪化により持ち越しとなった。

開幕以来勝ち点がない本学は、10月6日、7日の第7週の専修大学戦に臨んだ。専修大学は春季リーグで26年ぶりのリーグ優勝を果たし、今季でも対戦時まで首位をキープしている。本学は、先発に春季で防御率リーグトップタイの土倉将君(健体4・写真)を起用。2回までに2-3で専



修大に1点先行されたが、3回以降は相手の打線を封じ、5回に鈴木薫君(経)が放った逆転3ラン本塁打が決定打となり5-3で勝利を収めた。

続く2日目の先発・新ヶ江一聡君(経営)は、緩急自在の投球で相手打線を封じると、打線もつながり、6回、8回に1点ずつを挙げた。しかし、土壇場の9回裏に同点に追いつかれると、試合は延長戦へ。9回途中から前日の先発・完投勝利の土倉君がマウンドに上がると、好救援で味方の反撃を待った。すると、延長11回表に代打の進藤逸君(経1)が決勝打、山崎剛君(経営2)が追加点となる適時打を放ち、この回2点を挙げ3時間を越える熱戦をものにした。専修大学に連勝した本学は勝ち点1を挙げ、混戦模様の優勝戦線に踏みとどまった。

《記事・写真》柳下

東都大学野球秋季リーグ戦 試合結果

9月15日 13:05~ 対 中央大1回戦

中央大	0	0	0	3	0	0	1	0	0	4
国学院大	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2

勝 村川
敗 土倉

9月16日 10:28~ 対 中央大2回戦

国学院大	1	3	0	0	0	0	0	0	1	5
中央大	1	0	0	0	0	0	0	0	2	3

勝 新ヶ江
敗 山手

通算成績: 対 中央大 (1勝1敗) ※3回戦は10月20日(火)以降に順延

9月22日 13:38~ 対 亜細亜大1回戦

国学院大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
亜細亜大	0	0	0	0	0	1	0	0	×	1

勝 石塚
敗 土倉

9月24日 10:27~ 対 亜細亜大2回戦

亜細亜大	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
国学院大	1	0	2	0	0	0	2	0	×	5

勝 土倉
敗 石塚

通算成績: 対 亜細亜大 (1勝1敗) ※3回戦は10月20日(火)以降に順延

10月6日 15:27~ 対 専修大1回戦

専修大	1	2	0	0	0	0	0	0	0	3
国学院大	2	0	0	0	3	0	0	0	×	5

勝 土倉
敗 勝田

10月7日 16:20~ 対 専修大2回戦

国学院大	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2	4
専修大	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2

勝 土倉
敗 宮里

通算成績: 対 専修大 (2勝0敗) 勝ち点1

硬式野球部OB 都市対抗野球に多数

7月18日から29日まで東京ドームで行われた第86回都市対抗野球大会(毎日新聞社、公益財団法人日本野球連盟主催)に、硬式野球部OB17人が監督・選手として出場した。大会は、日本生命が優勝した。

以下は、出場チームおよび出場院友氏名・チームおよび個人成績。
▽太田市・富士重工業=飯野勝利監督(昭63卒・96期文) 2回戦敗退▽日立市・日

立製作所=宇野賢士投手(平25卒・121期経) 1回戦敗退、出場なし▽さいたま市・日本通運=藪宏明監督(平1卒・97期史)、鷲尾拓也投手(平24卒・120期日文) 1回戦敗退、出場なし▽東京都・東京ガス=岡崎裕一投手(平27卒・123期経) 1回戦敗退、出場なし▽同・明治安田生命=井村滋内野手(平27卒・123期日文) 1回戦敗退、1試合出場、2打数1安

打▽同・セガサミー=山崎福之投手(平25卒・121期経ネ) 1回戦敗退、出場なし▽川崎市・東芝=埜口卓哉投手(平24卒・120期経) 2回戦敗退、1試合出場1回自責点1▽横浜市・JX-ENEOS=渡邊貴美男内野手・主将(平23卒・119期日文) 2回戦敗退、2試合出場、7打数2安打、石川良平捕手(平26卒・122期健体) 出場なし▽名古屋市・JＲ東海=上村卓哉外野手(平25卒・121期健体) 1回戦敗退、出場なし、柿田竜吾投手(平27卒・123期法) 出場なし▽豊田市・ト

ヨタ自動車=水野一世外野手(平27卒・123期健体) ベスト8、3試合出場8打数2安打2打点、庄司輔外野手(補強選手[Honda鈴鹿]、平24卒・120期経営) 3試合出場9打数2安打1打点▽同・三菱重工名古屋=小木曾亮外野手(平27卒・123期健体) 1回戦敗退、出場なし▽京都市・日本新薬=高橋俊典外野手(平20卒・116期経) ベスト8、1試合出場、1打数無安打▽広島市・三菱重工広島=佐々木駿捕手(平27卒・123期日文) ベスト4、出場なし

司法試験 今年度は4人が難関突破

9月8日、法務省から今年度の司法試験合格者が発表され、本学法科大学院修了生からは4人が合格した。10月1日午後6時から渋谷キャンパス若木タワー有栖川宮記念ホールで、平成27年司法試験合格者祝賀会が催され、難関を突破した4人に祝福の言葉が多く寄せられた **(写真)**。

祝賀会では、開会にあたり武田誠法科大学院長・同教授と来賓として針本正行副学長・文学部教授があいさつに立った。武田院長は、「それぞれの努力の賜物です」と4人をたたえた。続いて、河合繁昭法科大学院准教授・渋谷パブリック法律事務所長の乾杯の発声で歓談が始まった。

出席した法科大学院在學生や教職員らが歓談する中、武田院長から合格者の紹介が行われ、続いて合格者一人一人が壇上に上がり合格の喜びを語った。熱い言葉の中に



は、合格までの努力や苦労が垣間見られ、出席者は熱心に聞き入っていた。

会の最後には法科大学院修了生、教職員から合格者に花束を贈呈。高内寿夫法科大学院教授のあいさつで中締めとなった。

4人の合格者には、これから司法修習生として実務修習と司法修習生考試が控えている。法曹界での4人の活躍を期待し、喜びを分かち合うひとときとなった。

平成27年度関東学生卓球秋季リーグ 1部2部入替戦～悲願の一部昇格～

10月10日正午から、和光市総合体育館で関東学生卓球秋季リーグの入替戦が行われた。今季2部リーグで2位の本学卓球部男子は、1部リーグ7位の埼玉工業大学に勝ち、昭和46年度春季リーグ以来の1部昇格を決めた。

試合は、4ゲーム先取の団体戦。本学はなかなか流れをつかめず、シングルス3試合を落とし、後がない状況に。続く町田幸希君(主将・神文4・**写真左**)・佐藤佑飛君(神文2・**同右**)ペアが粘りを見せ勝利を収めると、勢いづいた本学は5試合目の佐藤君、6試合目の宇仁田啓史君(日文2)が2ゲームを連取し、3-3のタイまで巻き返した。1部昇格の決定戦となった7試合目は、ベンチや応援席からひととき大きな声援が送られる中、町田君がコートに立った。試合はフルセットまでもつれこ



んだが、町田君が最終セットを奪取。0-3からの大逆転で勝利を収め1部昇格を決めた。

試合後、主将の町田君は「みんなのために勝ちたいと思って試合に臨んだ。4年間頑張ってきた」と嬉し涙を流しながら話した。これにより今季は、女子は2部で優勝し1部昇格を決めているため、男女そろっての1部昇格となった。

《記事》福沢 《写真》高村

ラグビーフットボール関東大学リーグ戦2部 対関東学院大学

9月27日、拓殖大学グラウンド(八王子市)でラグビーフットボール関東大学リーグ戦2部の今季2試合目が行われ、本学ラグビーフットボール部は関東学院大学と対戦した。

前半、本学は必死の守りを見せるも、関東学院大にトライを決められ、リードを許す。前半終盤、鶴留竜君(健体4)のトライをきっかけに、チームに反撃ムードが漂うも、5-28で前半は終了した。

後半序盤、本学は1トライを決め、前半の勢いのまま対戦相手との点差を縮めたいところだったが、相手の攻防は手堅く中盤にリードを広げられる展開に。スクラムに



持ち込まれた場面もメンバー同士は声の掛け合い、最後まで諦めないプレーを見せたが、19-64で敗れ開幕から2連敗となった。

《記事・写真》本間

ソフトテニス部 横田君 紀の国わかやま国体5位入賞

第70回国民体育大会(紀の国わかやま国体)のソフトテニス競技成年男子の部が、9月27日から30日まで白浜町の白浜テニスコートで行われ、本学ソフトテニス部に所属する横田直弥君(神奈川県代表・健体2・**写真右**)と風間純君(新潟県代表・日文2)が出場した。

神奈川県は、準々決勝で敗れたが、5、6位決定戦で石川県を退け、5位入賞を果たした。横田君は、ダブルス3試合に出場し、2勝1敗だった。

新潟県は、沖縄県に破れ1回戦敗退。風間君はシングルス1試合に出場したが、セットカウント1-4で敗れた。



平成27年度全日本学生柔道体重別選手権大会

10月3日・4日に平成27年度全日本学生柔道体重別選手権大会(男子34回、女子31回)が、日本武道館で行われた。昨年の同大会で男子81kg級準優勝だった主将の糸井滉平君(法4)が引っ張る今年の柔道部は、出場した9人のうち、5人が5位入賞の好成績を収めた。

1日目は、男子60kg級に満田知総君(法3)、66kg級に渡邊恭章君(健体

4)と中川直治君(神文3)、佐藤剛君(経営3)、久家寛己君(法2)、73kg級に戸室三四郎君(健体3)、81kg級に糸井君の7人が出場。中川君、久家君、糸井君の3人が5位入賞を果たした。

2日目は、本学から男子90kg級に田村優樹君(経3)と二見省吾君(経1)の2人が出場した。田村君は初戦で佐藤拳人選手(富士大)と対戦し、序盤は相手が優勢

に進めたが、一瞬の隙をついて、払い腰で一本勝ち。幸先の良いスタートを切った。順調に駒を進めていたが、準々決勝では寝技に屈し、5位に終わった。二見君も準々決勝まで進み、5位入賞となった。

今回5位入賞を果たした5人は、11月7日(土)・8日(日)に千葉ポートアリーナ(千葉市)で行われるリオデジャネイロオリンピックの一次選考会も兼ねた講道館杯全日本柔道体重別選手権大会に出場する。

《記事》平野 《写真》本間



事務局からのお知らせ

関東・東北豪雨により被害に遭われた学生・保護者の皆様へ

今年9月の関東・東北豪雨により被害に遭われた皆様には、心よりお見舞いを申しあげます。今回の大雨等の被害により、今後の家計が急変し学業生活に支障をきたすおそれのある学生は、保護者と相談の上、左記担当窓口までご相談ください。

(学生生活課：☎03・5466・0146/たまプラーザ事務課：☎045・904・7705)

平成27年若木祭開催に伴う休講について

若木祭開催に伴い、学部・専攻科・別科・大学院の授業を渋谷・たまプラーザ両キャンパスとも10/31(土)、11/2(月)は休講とします。

なお、11/4(水)は創立記念日のため休講。

経済学会が懸賞論文募集

経済学会では、経済学部生を対象に懸賞論文を募集します(個人・グループ応募可)。内容は経済・経営・会計等(経済ネット各コースも含む)に関するもので、A4サイズ10枚以上の論文と1枚程度の要旨(共にWORD形式)を12/7(月)～14(月)正午までに提出してください。問い合わせは渋谷キャンパス経済資料室(若木タワー9階)まで。

講座・学会等のご案内

ミュージアム連携事業 国学院大学×山種美術館
美術文化フォーラム2「村上華岳と京都、そして日本文化へ」
11/14(土)午後1時30分から、国学院大学渋谷キャンパス常磐松ホール。第1部は講演会。山崎妙子山種美術館長、日本画家の上村淳之氏、管生衛本学博物館長・神道文化学部教授が講演。第2部は、クラリネット奏者・吉田誠氏による「クラリネットコンサート」美術と音楽の調べ。参加費無料。定員270人(先着順)。申込フォーム、往復はがき、FAXでお申し込みを。問い合わせは国学院大学博物館「美術文化フォーラム2」係まで(☎03・5466・0359)。

キャリアサポート

4年生は「進路状況調査」にご協力を
文・経済・法・神道文化学部の全4年生を対象とした「進路状況調査」を11/14(土)まで実施します。「決定・内定状況」の確認ではなく、進路・就職に関する「現状」を把握し、今後の支援内容・企画の充実につなげていきますので、現状をお知らせください。詳細はK-SMAPYのお知らせをご覧ください。

その他のイベント等は、本学ホームページで確認ください。

インフォ
ダイジェスト

突撃!!

学生記者! ラジオで味わう漢詩の世界

現在、NHK ラジオ第2 で毎週土曜日午後8時30分（再放送翌週土曜日午前10時）から、カルチャーラジオ「漢詩をよむ」が放送されている。今年で30年目を迎える伝統あるラジオ番組で、4月から中国古典文学が専門の赤井益久本学学長・文学部教授が講師として出演している。今回、学生記者は同番組の収録現場に行き、収録の様子を見学。現場で働くスタッフの方々、元NHKアナウンサーで同番組では朗読を担当するフリーアナウンサーの加賀美幸子さん、そして赤井学長にインタビューを行った。

直撃!! “プロ”の仕事ぶり

番組の収録が行われている「NHK 放送センター」(渋谷区)内のスタジオに入ると、外部の雑音が一切聞こえない、燐とした空気に包まれた。「漢詩をよむ」は、出演者である赤井学長と加賀美さん、番組のプロデューサー、ディレクター、音声技術担当の5人で収録・制作に当たっている。

番組プロデューサーの田中英志さんは「音声だけの情報だからこそ、聴取者のイメージーションが膨らむのがラジオ」と話す。ラジオは、プロの語りと明快な解説がリスナーの想像力を膨らませ、漢詩の世界をより魅力的に伝えることができる。「2千年近く経った今も輝きを失わず、語り継がれる漢詩。詩人たちの心情から生まれた詩の素晴らしさを伝えるために制作に携わっている」と話した。



加賀美さんの漢詩朗読の声には一音一音に芯があり、かつ柔らかさも備わっている。漢詩は古来より男性的な文化の色が強く、固い印象を持たれがちだが、加賀美さんの声で女性らしい柔らかな印象をリスナーに与えることができる。加賀美さんが漢詩を朗読する上で大切にしていることは「リスナーが聞きやすいか、きちんと伝えられているか」である。加賀美さんは事前に収録分の漢詩の下調べをして、収録当日は赤井学長にアクセントなどの確認を取り、完璧な朗読になるよう心掛ける。朗読する上で読み手自身がきちんと内容を理解していなければ、詩に込められた感情をリスナーに伝えることはできない。漢詩の思いを正確に伝えるためにも加賀美さんは、自分の収録が終わった後も赤井学長の収録を聞き、分からない部分は教わっているそうだ。

ディレクターの津田昭一さんは、収録された音声を番組1回分(30分)に収まるように編集し、スタジオの現場監督として収録が円滑に進むように指示出しを行う。リスナーに質の高い音のラジオを届ける、読み手とリスナーの橋渡し役を担っているのである。

それぞれのプロフェッショナルが集まり、最高のものを作り上げ1回30分のラジオ番組ができていくのだ。

時を超えて親しまれる漢詩

漢詩は中国で成立した文学の一つだ。現在さまざまな文学ジャンルが存在し、中には時代の流れとともに消えていった文学もあるが、「詩」は古くから変わることなく世界中に残っている。赤井学長は「詩」そのものが中国文学のエッセンスになっているという。律詩や絶句といった決まった形の中で読み手の感情が込められた漢詩には、数千年の時を超えて共通する悲しみや喜びなどの感情が存在している。

NHKラジオ講座には教材として販売



されているテキストがある。赤井学長は、このテキストの編集も行っている。収録した漢詩を選ぶ際には詩形と時代に偏りが出ないように気をつけたという。漢詩は詠まれた時代によって趣きが全く異なる。例えば、唐時代は友人との別れや科学のような特別な出来事を詠んだ詩がほとんどだが、宋時代以降は日常の出来事を詠んでいるものが多い。赤井学長はそれらを味読しながら聴いてほしいと話す。

音だけで伝える

「想像力を膨らませ、漢詩の世界に親しむを持ってほしい」と話す赤井学長。ラジ

オ講座は聴いている人たちの顔が見えず、収録時点で反応を窺い知ることはできない。また、リスナーの年齢層は、10代から90代まで幅広い。学生の表情を見ながら行う「生」の授業と「録り直しができる」ラジオ講座は全く違う環境だが、講義スタンスは授業と何ら変わらないという。約40年間、授業で培ってきた講義内容や語り口調、間の取り方などがラジオ講座でも生かされている。穏やかな語り口でラジオから広がる漢詩の世界に耳を傾けながら、土曜日の夜を過ごすのも、秋の夜長にはいいかもしれない。

《記事》本間 《写真》福沢・安田

特別展「江戸のベストセラー『唐詩選』の世界」
国学院大学博物館で11月15日(日)まで開催中!

アジアの文芸様式として普遍的であった漢詩を取り上げ、『唐詩選』から江戸時代の人々の目に映った中国の文化を探究します。

会場 国学院大学博物館 企画展示室
開館時間 午前10時～午後6時
(入館は午後5時30分まで)
入館料 無料

渋谷学生探偵団 Z × シブヤ経済新聞

アニメ聖地巡りで見つける新しい渋谷の姿

バケモノの世界の入口

渋谷センター街のバスケットボールストリートにある路地裏へとつながる小さな道は、劇中でバケモノの世界の入り口として登場するアニメ聖地だ。残念ながら入ることはできないが、ビルに挟まれた薄暗いその道は、覗いている私たちを映画の世界に引き込んでいくような雰囲気を持っていた。いかにも人間界とは違う、異界への入り口といった様子で、賑やかな渋谷の街とは一風変わった雰囲気を醸し出している。

静と動の渋谷

続いて私たちは本学から程近い場所にある区立渋谷図

私たちが普段行き来する渋谷の街には、多くのアニメのモデルとなったスポットが存在する。このようなスポットのことを俗に「アニメ聖地」と呼ぶ。今回、学生記者はアニメから新しい渋谷の姿を発見するべく、今年の夏に公開されたアニメーション映画「バケモノの子」(細田守監督)のアニメ聖地7カ所をシブヤ経済新聞編集長の西樹さんと共に巡った。

書館へ向かった。ご存じの通りセンター街から距離を置いたこの場所は、住宅や学校が集まる中にあり、センター街の喧騒とは掛け離れている。また、本学隣地の氷川神社もアニメ聖地の一つだ。歴史ある神社の境内は自然豊かで、ついここが渋谷であることを忘れてしまうほどだ。

今回私たちはアニメ聖地を巡ることで、渋谷という街が賑やかさだけでなく、落ち着きや少し妖しげな雰囲気などのさまざまな顔を持っていることを改めて知ることができた。アニメ聖地がどのようなシーンで登場するかは映画を観ていただきたい。アニメ聖地巡りを通して、違った視点から街の素顔を発見することができるはずだ。

《記事》柳下 《写真》野呂 《映像》永井



モデルとなった氷川神社で



写真にスマホをかざすと渋谷のアニメ聖地紹介動画がご覧になれます

編集後記

必須の「アタック」と「ペン」



今号で私は副編集長や映像制作担当を務めました。今回は自分の役割を通して見た、K:DNAの裏側を書いていこうと思います。まず、編集長の仕事についてです。副編集長を務めたことで、編集長の仕事を間近で見ることができました。編集長の仕事の一つに

K:DNAの裏側

「台割」と呼ばれるいわば新聞のメニュー表作りがあります。コラムごとに写真の枚数、文字数を1つ1つ計算します。コラムを掲載する順番を決めたり、紙面に収まる文字数を考えたり、気をつけるべきことがありました。K:DNAとして形にするには、編集長は重

要な役割だと知りました。

映像制作では、自分が思っている以上に大変なことがわかりました。5分の映像を作るだけでも、撮影には1~2時間を要し、編集にはそれよりも多くの時間を費やしました。このように以前とは違った立場で制作に携わってみると新たな発見があり、K:DNAが完成するまでには多くの苦労があ

ることを実感しました。しかし苦労した分、紙面ができあがったとき、良い映像が作れたときにはやりがいを感じます。

今年のK:DNAの制作も冬号を残すのみにになりました。私たちメディアチームの年間目標「読者の一番になる。読者に待ち望まれるK:DNAを目指す」ことを忘れずに制作していきます。(本宮)